

あらかやま
荒山古墳群

所在地 豊田市渡合町
調査理由 第二東海自動車道建設
調査期間 平成14年4月～7月
調査面積 1,200 m²
担当者 宮腰健司・小嶋廣也



調査地点 (1/2.5万「豊田南部」)

遺跡の環境 荒山古墳群は、矢作川左岸の標高80m前後の舌状に延びる丘陵上に立地し、巴川との合流地点の北西約1kmに位置する。南に巴川沿いの丘陵には琴平古墳群が、対岸には水源山古墳群や豊田大塚古墳が所在する。

調査の経過 今回の調査は、第二東海自動車道建設に伴い、日本道路公団から愛知県教育委員会を通じて実施したもので、石室の存在が確認されていた1・2号墳を中心に、1,200m²の面積を調査した。

調査の概要 **SZ01 (1号墳)** 調査開始時点には、墳丘の墳頂部はすでに無く、石室上部が破壊されて露出している状態で、解体に際して転落したと思われる天井石などの石が、古墳の南西側に散乱していた。また石室内にも大型石を含む多数の石室石材が転落しており、調査はそれらの石と流入していた砂を除去しながら順次進めていった。さらに石室内の堆積土は篩にかけ、微細遺物の検出を行った。

墳丘は流出が激しく、現状では高さ20～30cmの盛り土が確認されたのみで、明瞭な版築などは確認できなかったが、墳長は7～8mを測る。石室は地山を掘り込んだ墓壇の中に作られており、石室と墓壇壁との間には、版築状に小礫混じり土が詰められている。検出時の石室の規模は、全長4.8m・玄室長3.6m・玄室上端幅0.9m・玄室下端幅1.2m・玄室高1.6mを測る。石室は周辺で産出する板状に剥離する花崗岩を用いており、平面形は長方形を、断面形は上部が持ち送りされて、ややアーチ状を呈している。石室の奥壁は、側壁に比べやや大きな石材を用いているが、基本的には同様の形状をしている。羨道部分は、花崗岩を使用した閉塞石が詰められており、石室床面とは約90cmの大きな段差がある。この石室の開口部側にも奥壁同様にほぼ垂直に立ち上がる石積みがあり、墓壇の間には土が詰められていた。これらの形態から、SZ01の石室は「竪穴系横口式石室」に分類される。棺は極めて狭小な開口部から石室内に搬入したか、または安置後に開口部部分を構築したと思われ、追葬時には石積みを取り外して棺を搬入している可能性が考えられた。

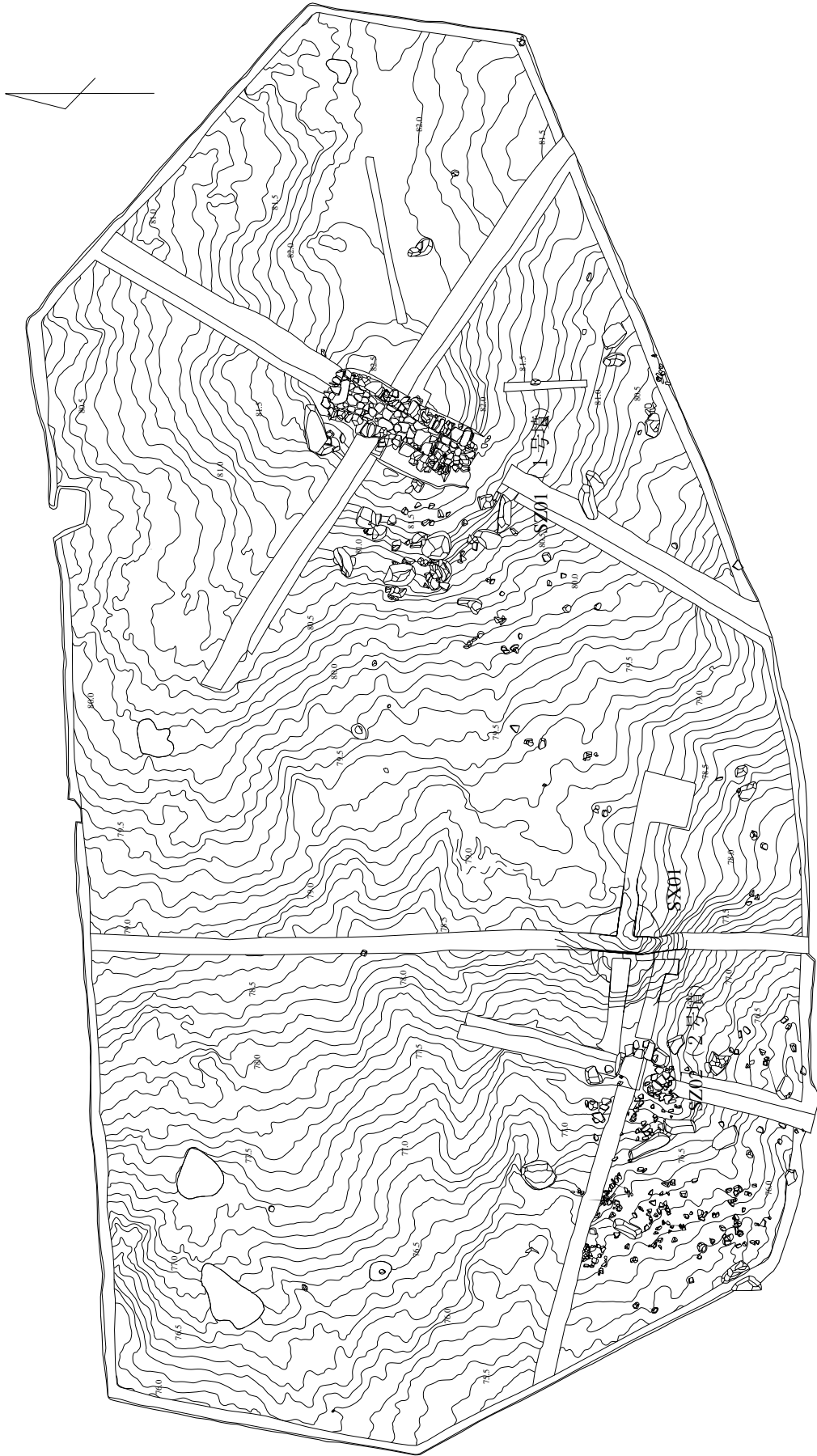
遺物は、石室内のほぼ全域でガラス小玉、羨道部から石室に移る部分で杯蓋、石室南西隅のほぼ床面上でハソウ・杯蓋・大刀、石室内から鉄鏃・耳環が出土している。これらの遺物より、SZ01の築造時期は6世紀中頃を中心とした時期になると考えられる。

SZ02 (2号墳) 調査開始時点にすでに石室全体が露出しており、天井部や石室の左側壁・床面部分にまで破壊が及んでいた。墳丘はほとんど残存しておらず、墳長は不明である。検出時の石室の規模は、全長1.8m・玄室推定幅0.7mを測る。石材は小型の花崗岩を用いているが、奥壁のみ縦1.2m・横0.7mを測る大型のものとなっている。

石室内より遺物が出土していないため、築造時期は不明であるが、周辺から出土した須恵器より、7世紀後半であると推定される。

また、SZ02の東側には径2～3m、高さ0.8mの盛り土SX01が検出されている。

(宮腰健司)



荒山古墳群遺構配置図 (1 : 200)



SZ01 石室 (南から)



SZ01 石室 (北から)



SZ01 石室調査前 (西から)



SZ01 石室表土除去状況 (南から)



SZ01 石室開口部 (北西から)



SZ01 石室開口部半裁 (西から)



SZ01 石室基底部・墓壙 (南から)



SX01 (北東から)



SZ02 石室 (南から)



SZ02 石室 (西から)